

古在由秀氏ロングインタビュー

第5回：台長時代（2）



高橋 慶太郎

〈熊本大学大学院自然科学研究科 〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1〉

e-mail: keitaro@sci.kumamoto-u.ac.jp

協力：小久保英一郎（国立天文台）、高橋美和

古在氏のインタビュー記事の連載は今回が最終回です。前回から引き続き台長時代の話をつづけます。13年間の東京天文台長・国立天文台長の任期中、古在氏は国立天文台への改組と、後にすばる望遠鏡と呼ばれることになる大型望遠鏡の計画実現に力を注ぎました。改組は思うとおりに進んだのでしょうか。すばるのような大計画はどのようなときに実現されるのでしょうか。最後にご自身の研究生生活を振り返っていただき、若い研究者へのメッセージもいただきました。

●水沢緯度観測所

小久保：水沢は改組前どういう状況だったんですか¹⁾？

古在：水沢はねえ、坪川(家恒)さんっていう人が所長だった。坪川さんっていうのはね、もともとは国土地理院にいた人で、国土地理院から地震研究所の所長になった人。地震研究所は紛争ってあったでしょ。それで水沢の所長になったんですよ。

水沢はね、木村栄先生って大先生がいて、僕はこれは萩原(雄祐)先生から盛んに聞かされたんだけど、木村先生と2代目の東京天文台長だった平山信さんとはものすごく仲が悪かったんだって(笑)。それで木村さんは東大から人を採らないって話。だから木村さんの後の川崎俊一所長は京都大学を出て、それから職員も京都大の人ばかりだったんだけど、初めて昭和15、6年ぐらいにここにいた服部(忠彦)さんという人が東京天文台から向こうに行った。

高橋：水沢は国立天文台に来る前は緯度観測所ですよ？

古在：水沢は緯度観測所。だから直轄研ってやつですよ。直轄研というのは文部省直属で大学なんかには属してない研究所で、例えば遺伝研とかもっとほかに教育研究所とかがそれに属してた。さっきも言ったけど、僕が東京天文台長になったのは1981年で、その頃に第二次臨時行政調査会というのができた。その時に文部省と科学技術庁の科研費を一緒にするとかそういう構想を出した。僕らは科技庁と文部省の科研費の性格がどう違うのかということを一生涯懸命説明して、文部省の人も喜んでくれたんですよ。それから研究所や大学の見直しをやらされて、それで水沢もやり玉に上がったんだよね。

高橋：どういうことですか？

古在：あれが研究所として値するのとか、そういうところまで言われて、これを水沢の人に言うと怒られる。坪川さんはね、そういうことを職員には言わなかった。

高橋：緯度観測所ではずっと測地をやってたわけですか？

古在：そもそも1899年かな、その頃に世界中でまず極運動というのを正確に測ろうとしたわけ

よ。天頂儀というのをを使って、天頂にしか見られない星を観測して、毎日毎日その星の天頂からの距離を観測して、その天頂からの距離が変わるっていうのは星の位置が変わるのではなしに、緯度が変わるといこと。要するに地球の実際の自転軸の周りに回転軸がどうい周期でどれだけ動いかっていうのが問題になってたわけですね。それが緯度観測のももとの始まりで、世界中の北緯39度8分の6カ所くらいところで観測をしようということになった。39度8分の所っていうのは同じ星を観測できるから、そこに観測所を作ろうと。その中の一つが水沢だったんだよ。それが1899年から始まったんだと思うよ。それでその時の所長さんが、木村栄先生。

小久保： そうやって水沢って場所が決まったんですか？

古在： うん。あそこだけがちゃんと39度8分に近いんだという話で。それが田中館愛橘っていう当時有名な先生がいて、その人がそういうことに興味をもって、その人が岩手県出身なんだな。それであの場所を決めたという風に僕らは聞いてますよ。

高橋： その業務はずっと続いたんですか？

古在： ずっと続いたわけ。ところがね、その頃になると僕もよくわかってるんだけど、人工衛星なんかが上がったり、それから星のVLBIの観測なんかをしたほうが、その緯度の変化というか、回転軸の変化がよく決まるようになったんだね。それから人工衛星でもそれをやったんだよ。そうすると、世界的にもそういうのは新しい技術でやったほうがいいということになって。それで水沢自体の存続理由も疑われてきたんじゃないかな。

これは僕が言うだけで水沢の人に聞かれると怒ると思うんだけど、水沢は木村先生でもってたわけよ。Z項で。それで今はZ項っていうのはないわけよね。電波やなんかで観測しても、Z項っていうのは必要ないんですよ。あれはやっぱり地球の中に重いコアがあって、そのために歳差とか章

動とかが少しずつ違うことが星の位置に関係があると。さらにそういうことがちゃんとわかる人がいれば、そういうことから地球の中の内部構造までわかったはずなんだけど、それはわかったのではなしに、後から考えてみたらそうだったと。だからZ項はないんですよ、今。

そんないろんなことがあってやっぱり水沢は研究所として独立しておけないという。僕なんか意見を聞かれたことないですよ、本当は。だけど第二次臨調でそういう話になったんで文部省は困って、あそこの局長が僕に個人的に一緒になってくれませんか、と言ったことは確か。だからそういう話を聞いたときに、「これはしめた」と思ったわけね。そこで苦勞する必要はないからね。僕はまず天文で大学共同利用機関を作るといこと自体にうんと力をかけなきゃいけないかと思っただけね。それはまあ実際なくなった。

高橋： 文部省もそういう意向で、そこはもう簡単にクリアできると。

古在： うん。文部省が僕に期待したのは、望遠鏡を作ることでなしに、水沢と一緒にって研究所を作ることだった。

高橋： 天文台になってから水沢をどうい風に使ってこよう、っていうのはどうやって？

古在： いやだからやっぱり新しい施設を導入しようと思っただんじゃない。やっぱりその一つで結局実を結んだのが、今のVERA計画だよ。元々はVLBIで地球の回転運動を調べるというのが初めの目的だったんだけど、それが間違っ方向に行って（笑）、それで測地関係の人はだいたいぶつぶつ言った人がいたみたいだけども。だってそういうことやるのは全然書いてなかったもんね。結局やっぱり国立天文台になってから電波の人がずいぶんあそこを助けたわけだよ。電波の人が何人か行って。それから電波研からも人が来てるし。そうじゃなきゃ旧水沢の人だけではできなかったと思うよ。

高橋： もともと水沢には電波の人が全然いなかった

たんですか？

古在：いなかった。

高橋：じゃあもう最初の頃からあそこに電波のやつを置こうという風になったわけですね？

古在：まあね。だから初めの頃から方向転換して、それから野辺山の人もずいぶん助けたね。森本(雅樹)君なんかもずいぶん助けたと思う。それで45メートルを作る前に三鷹で6メートルのミリ波の望遠鏡を作ったでしょ。あんなのをあそこにもっていったりなんかしてたよね。

高橋：VERAは今だいぶ活躍してますよね。そういう意味では水沢は生き返ったわけですね？

古在：うん、あれは生き返ったと思うけど、あんまり俺たちがやったんだって言うと怒るかもしれないからさ(笑)。それで僕が水沢を利用したっていう非難があって、それはある程度当たってるんだ(笑)。

それから言ってみれば水沢のほうが東京天文台より格が上だったんだよ。格とはどういう意味かというよね、東京天文台には台長職っていうのはなかったわけ。例えば理学部だって教授が理学部の学部長。学部長っていう専門職はないんだよ。それで結果としては水沢の所長のポジションを僕が取っちゃったわけだよ。

高橋：水沢には所長の専門職があって、それが国立天文台長のポストになったと。

古在：東京天文台には台長って職がなかったんだから。それでこれは噂で聞いただけなんだけど、宇宙研はああいう風になったときに所長を作るために教授の定数を1名減らしたんだってね。だけど僕らが減らす必要がなかったのは水沢にそういう所長職があったから。

それで東京天文台では事務長ってのは課長待遇だったんだね。ところが水沢には庶務部長というのと庶務課長と会計課長というのがいたんだ。国立天文台になって管理部長というのができたのは向こうの庶務部長が管理部長になったから。それで課長も3人になった。だからそういうのを見て

みるとね、水沢に乗っ取られてるわけよ。

高橋：天文台もそれをきっかけに格が上がったということですか？

古在：だから共同利用機関というのは格が上がったことになりますよね。

●国立天文台に改組して

高橋：実際に国立天文台に改組して、いかがでしたか？

古在：僕は共同利用研になったときに恩恵というのは初めはよくわからなかったけど、現実に東大の中にいたら定員なんて増えないものね。で、共同利用研になってから増えた。それから、東大のときはいろんなものを要求するのでも東大を経ていかなきゃならなくて、東大を経ないでいくと東大に怒られたりとか。

高橋：だいぶ共同利用しやすい状況にはなったわけですか。

古在：それはそうでしょうね。だから、ここの人事や何かでもよその大学の人がちゃんと意見を言うようになった。意見というより決定権をもっている運営委員会がある。やはり昔の先生はよその大学の人を採ろうとすると、「君たちは自分が教えた学生に自信がないのか」とかそういうコメントをした人もいたよね。

高橋：基本的には自分の大学の出身者を採ると。どこの大学もそんな感じだったんですかね。

古在：だから、逆に言えばね、要するに他の国立大学もみんなの意見を聞いて採用すればいいのではないかという人が出てくるのではないかと思うことがよくあるよ。必ずしも共同利用がいいとは言わないけれども、ま、少なくとも一歩前進であったことは確かだと思うよね。

高橋：国立天文台になってから何か課題はあったんですか？

古在：だから途中から、ALMAみたいなのはどうしてくれるのだという話も出てきたし。

高橋：ALMAの話がでてきたのはその辺ですか。

古在：かなり前から石黒(正人)君なんかやっていたよね。

高橋：在任中はALMAはどういう話になっていたのですか。

古在：僕のときはまだ全然、予算要求していない。それから水沢は一緒になったらVERAがつくはずだといっていたのだけど、はじめの頃はあそこは電波の人もいなかったんだもんね。それで電波の人が入ってくるのを整備してからやらないとできなかったよね。あれはだから、次の小平(桂一)氏のときに行ったのではないかな。

高橋：小平さんに引き継ぐときは何か、こういうようにというのはあったんですか？

古在：いやいや、こういう問題はあるとは言ったけど、どうやってくれとは言わなかったよ。あと、スーパーコンピューターの話が出たよね。あの頃ちょうど、アカデミックディスカウントがけしからんという話から始まったんだよね。要するにアメリカや何かの関係で。日本は非常にアカデミックディスカウントがあったでしょ。それで、あれがけしからんという話が出てきて、それでそのうちに観山(正見)さんや何かから話がきて、富士通にレンタル流れの計算機が戻ってきたからもらおうやということになってさ。それで文部省に行って、「ディスカウントはいけないけど、タダでもらうのだったらいいだろう」と言ったんだよね(笑)。そしたら「すごい飛躍的論理ですね」と言うから(笑)。あれは結構、うまくいったんだよね。あれは僕の台長在任中についたのではないかな。その前に野辺山がさ、初めスーパーコンピューターみたいなこと言っていたのだけど、ワークステーションが複数あればいいという話になって。

高橋：国立天文台になってからはどうやって台長を決めたんですか？

古在：一番最初は準備会みたいな人が選挙したらしい。それからあとは評議委員かなんかの選挙で。2回目のときは早川(幸男)さんが最後に東京

に来た会議なんだよ。それからすぐに亡くなったんだ。

それからこれも本当に下世話な話だけど、東大にいたときはね、「東京天文台は夜間勤務があるから超過勤務手当を特に多く出している」と言われてたんだよね。それで僕はさ、東大を出て東大から特別に割り当てられたやつがなくなると、こりゃ困るなあと思ってた(笑)。本当の話、これは誰にも言わなかったんだ。そんなこと言ったら、それじゃあ国立天文台になるのは嫌だなんていう人がたくさん出てくるから(笑)。そしたらね、国立天文台になって予算の内示があったときにね、前から会計をやった職員が「あー、東大に騙されてた！」って。なんとね、超過勤務手当が東大にいたときより5割増しついていた。要するに東大がピンハネしてたの、だと思う(笑)。

高橋：そんなことがあるんですか…。

古在：それからね、前から部長会議とかいうのが東京天文台にはあってね、超過勤務手当をどう割り振るかという案が出てそこで決めていた。ただ、僕が見たところ、これは邪推かもしれないけど、例えば事務なんかで守衛さんにはこれだけ特別にもっていくとか、運転手は特別だからこれだけもっていくとか、そんなことを言ってもっていったけど、実際に運転手や何かに回っていなかったと僕にはらんでいたよ。

高橋：誰かがどこかで抜いていたと。

古在：だってそれは事務の中で使えるもの。だから僕が台長なってからは、こう割り当ててやったのだと大きな声で言って。さっきの話で、東大からこっちに来る超過勤務手当が少ないというのもあの辺でうまく使っていたからだよ。

高橋：台内でもそれに近いことがあったと？

古在：特に事務ではそういうことがあったと僕は思っていたよ。それから直接には知らないけど、わりに地方の大学から来た経理の課長がいるとね、地方の大学ではそういう人は偉いからさ、超勤や出張手当を何かに回すとかしているらしく

て、ここでもそういうことやりたがった人がいたと聞いたよ。

高橋：古在さんが台長になってからはその辺をクリアーにしたわけですか。

古在：クリアーにしたつもりだったけどね。特に国立天文台になってからはわりにそういうことをちゃんとやろうと思ってやったのだけど、そうしたら幹事会というのに助教授の代表も入れろとかいうことになって、そういう人を入れたらまた細かいことを言い出してさ。それで事務が嫌がってね。かえて、そういうようなことを辞めろとかいう話もあったけど、うまくやらないといけないのだよね。

●天文と政治

高橋：すばるを作るとか国立天文台に改組するとか、いろんな計画や問題があったときに、そのときの政権とか文部大臣とか事務次官とか、その辺の人がどういう人かというのは関係するんですか？

古在：それはよくわからない。でも文部省がこういう考え方をしているとか、文部省がこう言ったとか言う人がいるけどね、文部省として何か正式に決めていないことも多いと思う。ただ文部省のある人がこう言ったということなんですよ、ほんとに。だからこのごろはね、方々の教授会や何かで、文部省がこう言っていますと言うとみんな黙ってしまうのだけど、そんなことはありえないのだよね。全体の意見ではないんだよ、あれは。

高橋：たまたま誰かと話をしたときにそんなことを言われたというだけで。

古在：そうそう。だから、要するに望遠鏡を作るときに大臣がこう思ったからということはないんだと思う。担当の局長とか課長とかでそういうのをやろうと思っている人がいたとき、あれは通った。僕はそう思っている。

高橋：上の人はそんなに個々の案件までは考えないということですか。

古在：わからないけどそうだと思うよ。要するに教科書をどうするとか、この教科書を採用したらけしからんというのは大臣が言うかもしれないけど。

それから、僕がいたころはいわば上級職ではない人たちがずいぶんど一生懸命やってくれた。僕が文部省に行くとき壁のほうに座っている人が、「古在さんだけ挨拶してくれるから」って言った。だから、すばるなんかできたのは偶然もあるんだと思う。あれは局長や何かがつぶそうと思っただらいくらでもつぶれると思うんだよね。どこかで方針を立ててこういうものをちゃんとやろうという結果でなければ予算が認められないと思う。

高橋：学術会議はどういう位置づけになるんですか。

古在：学術会議は今ほわりと政府に意見を言うね。実はね、すばるは学術会議を通してない。

高橋：そうなんですか。じゃあ、あんまり関係なく。

古在：うん。野辺山は学術会議通した。それから岡山の74インチも学術会議通した。

高橋：通すか通さないかはそんなに問題じゃないんですか？

古在：問題じゃなかったよね。あのころは文部省の中の学術審議会を通すか通さないか。しかも、通すか通さないかというよりは、あそこで取り上げてもらえるかどうかというのが問題で、取り上げるか取り上げないかというのは文部省の関係の局長や課長などが決めるんだと僕は考えていました。

高橋：学術審議会で議論してもらうのが大事だと。そこですばるは？

古在：やってくれた。

高橋：そういうところでも、さっきの局長さんや課長さんみたいな人ががんばってくれたんですね。

古在：うん、それで、学術審議会には天文以外の人がたくさんいたからちょっとうるさくてね。

中根千枝さんもそんな感じで、中根千枝さんは東大の何かの委員会で一緒に、「古在さんがあんな顔をして、いいと言うから仕方がないと思って賛成した」だとか言っていたけれどもね（笑）。それからすばるとスーパーカミオカンデは学術審議会を通ったのが一緒なんです。それで天文の人たちはさ、「物理と一緒にすると物理にしてやられるぞ」っておどすし。それから委員会にスーパーカミオカンデの人は出てなかったんだ。それでスーパーカミオカンデの人が心配してね。「古在さんはすばるのことにしかやらないんじゃないかと思って心配してたらちゃんと二つ通った」って（笑）。

高橋：その時は小柴(昌俊)さんと一緒に喜んだりしたんですか？

古在：いやいや別にね、彼はあまりうれしそうな顔をしないんだ、なんでも（笑）。もっと下のほうの人たちがとても喜んでたよ。

高橋：予算がついたかどうかというのはいつわかるんですか？

古在：だいたい12月の末に大蔵省の原案っていうのが出るでしょ？ ほんとは議会通んなきゃ正式じゃないんだけど、その段階で入ってればだいたいいいわけですよ。12月の28日とか29日とかにみんな行くわけですよ。内示っていうのを聞きに。

高橋：そういう天文関係の大きな予算なんかの決定に政治家がかかわることはあるんでしょうか？

古在：要するにあの頃は、今でもそうかもしれないけど、自民党勢力が強くて、すべての予算というのは自民党の文教部会というのを通らないといけない。

高橋：すばるのときもそうだったんですか？

古在：ところがすばるのときは、東京天文台で誰かが自民党の人に「野辺山の次は赤外線望遠鏡だ」って言ったらしいんだよね。そしたら「俺が聞いているのは光の望遠鏡で、そんなのが出てくるとは聞いていない」と言って、えらい怒った人

がいたらしいよね、赤外線専用だと思ったんでしょ。一時、それでつぶれかかった。文部省も諦めたことがあるんだよね。それで僕らが仕方がないから頑張るって。

高橋：その人に説明しに行ったんですか？

古在：うん。でもどうして予算が通ったかなんてわかんないよ、本当に。僕はあの時たまたま局長と課長でいい人がそろったから通ったんだと思っているよ。

高橋：政治家に話に行くというのはよくあるんですか？

古在：すばる関係者の中には政治家のところに行った人もいたみたいね。すばるが通ったときに、文部省からね、「この人とこの人は一生懸命やってくれたから挨拶に行け」と言われたこともあった。

高橋：それは、やはり文教族の人なんですか？

古在：文教族というよりも、それは天文ファンだったりして。

高橋：そういえば、与謝野馨さんが天文月報で記事を書いているのを見つけてびっくりしたんですけど²⁾。

古在：あれは、磯部(琇三)君が野球部で知っている人なんだよね。なんか磯部君は東大野球部の補欠キャッチャーなんだよ。えーとね、河本派というのがあったじゃない、河本さんという人がわりと天文好きな人でね、あの人が応援してくれたということで。

高橋：河本敏夫ですか。

古在：もう、亡くなったろうね、きっと。この間、ALMAの東京でのお祝いみたいのに行ったら、政治家が2-3人来ていたね。

高橋：天文というのはファンがいっぱいいそうですよ。

古在：うん。だけど、軽々しくね、応援してやると言っても実際応援してくれる人はあんまりないんだよ。

高橋：小柴さんの同級生で文部省の偉い人がい

て、カミオカンデのときに世話になったという話を聞きましたけど。

古在：あれはね、俺が言ったんだ。小柴君が、「文部省に俺らの知っている人いないのかね」と言うからね、そのころの文部次官がそうだよと言ったら、そこに行ったんじゃないかな。あいつは何かね、偉い人をつかむのすごいんだよ。大蔵とかね。

高橋：古在先生が紹介したんですか？

古在：いやいや、紹介したというより、名前を言っただけだよ。あの人、大蔵省の昔の次官だった人ずっと知っているものね。あの平成基礎科学財団とか彼のところに行くと、評議員か何かで来ているもの。

高橋：あの世代の偉い人というのだいたいみんな一高なんですよ。

古在：そうだよ。

高橋：だからみんな知っている感じなんですかね。

古在：ま、そういうわけです。何かあまりそういうことばかりやっているとたいへんだよね。久保亮五さんなんかとてもそういうの嫌がっていたよね。

高橋：そうなんですか。

古在：「このごろ科学者で予算認めてもらおうと思って政治家にくっつくやつがいるけど、ああいうのはよくない」と言っていたよね。

●すばるについて

古在：すばるについて今思い出すとアメリカで100インチができて200インチができたから、300インチって話だったんだよね。だから初めJNLT (Japan National Large Telescope) って大型望遠鏡計画は7.5メートルって話だった。ところがヨーロッパの南天天文台なんてみんな8メートルになったでしょ。だから何回か予算が落とされた後、8メートルに変更できないかって文部省に言ったらね、「金額がそう変わらないんだっ

らやってもいい」って。それで8メートルになったんですよ。しかも家(正則)君やなんか実際に鏡やったら8.2メートルだったっていうんで、いつの間にか8.2メートルになってた(笑)。

それからすばるは世界的には費用が高すぎるという評判が出たんだけど、例えばアメリカだと初めの予算出すときにわりに少なめに出すんだよね。そうすると通りやすい。ただその後で増やすことができるわけ。ところが今は知らないけど当時日本だと、初めの予算から増やすことはできなかったんだよね。だから言っちゃ悪いけど、ふっかけたんだよね。ふっかけないでしょうがない(笑)。それがうまくいってああいうのができたんだと思うんだけど。すばるも野辺山も。

高橋：JNLT計画は初め国内に作って練習してから海外に作るか、初めから海外に作るかで議論があったということでしたね。古在先生は初めから国外に作ったほうがいいっておっしゃってたわけですが、もしその時の台長が国内のほうがいいだろうって言う人だったら、また違ったんですか？

古在：それは違うでしょう。だって僕より前の台長のときにそういう決定があったら、海外には作らなかったと思うよ。

高橋：じゃあやっぱり古在さんが国外について意見をもっていたのが大きかったわけですね。

古在：そうだと僕は思ってるけど、一般世論はどうかわからない。それで結局そうやってやってみると、例えば小平氏なんか末元(善三郎)さんのときには黙ってたけども、やっぱり国外のほうがいいと思ってたんですよ、ずっとね。実際小平氏やなんかはかなり前からちゃんとコンタクトは取ってたんだね。

高橋：ハワイとですね。

古在：それから逆に言えば、あそこはいろんな国が望遠鏡を作ったでしょ？で、向こうは日本がなぜ来ないかって言ってたんだよね。

高橋：じゃハワイ側としては歓迎すると。

古在：もう大歓迎。

高橋：じゃあいったん、予算が認められてからはわりと順調で？

古在：まあ、そうだね。僕は起工式までだよ、やったの。

高橋：実際にできていくのは台長をやめた後になりますけど、後々どういうふうになっていったかというのをご覧になっていかがでしたか？

古在：まああれでよかったという気はしますね。今でも覚えているけど国立天文台長を辞めるときに「普通はこういうときに、大過なく過ごしましたって言うんだけど俺はまだ言えない」と言った(笑)。

高橋：それはまだすばるがどうなるかわからないと。

古在：そうそう、成果がどれだけ出るかわかんなかったからね。まあほんとにダメになってしまうなんてことは思ってなかったけど。だけどまああれだけ成果が出たからよかったと思うよ。

それからすばるはやはり野辺山が成功したというのがあるよね。その後の計画もやっぱりすばるが成功したということもあると思うよ。それこそ成功するためには日本の天文学者は全部そろってやってくれるということが大事なんだ。例えば地震予知とかはさ、どこかの人が反対しても、反対が多くても、大きなグループだったら通るけど、天文なんかで誰か有力な人が「あんなすばるなんか計画出ているけど、あんなのしょうがないよ」と一言言ったら、つぶれたよね。

高橋：コミュニティーが小さいからということですか？

古在：ま、そうでしょ。小さいというより、勢力がないのだよ。今はずいぶん勢力が出てきたと思うけど。

●台長時代を振り返って

小久保：13年間、台長ですよ。そういうことを長くやられるというのは、すごいことだと思うんですけど。

古在：長いことやっているよね、例えば、小柴なんかは、「天文には人材がないんだな、お前が長くやるなんて」と言っていたけど(笑)。

小久保：台長をするというのは自分で好きなことをする時間がなくなってしまうと思うんですけど、何というのですかね、自分が犠牲になってという言い方だとあれかもしれませんが、自分の時間を割いてみんなのためにとか、日本の天文学のためにとか、そういう大義があって初めてできるのではないと思うんですけど。

古在：それはあるよね。

小久保：日本の天文学を、例えば観測を世界レベルにとか、そういう全体としてどうにかしていこうという気概があって続けられてこられたのでしょうか。

古在：だから、やっぱりそれは第二次世界大戦直後は完全に外国にやられていて。要するに戦後すぐの時に世界では大発見が結構あったんだよね。パロマーが動き出したとかさ、オランダなんか大して裕福でない国が、銀河系の21センチ線観測なんかやったでしょ。あれは全くのアイデアだよ、自分たちのアイデアだよ。やっぱりあのころでいえば大発見ですよ。ああいうのが出てきても日本はただ黙って見ていただけだから。

高橋：日本の観測を世界レベルにしたいというわけですね。将来計画委員会などで若い人たちから、こういうのがやりたいという声がたくさん出るわけですよ。

古在：うん、僕らは何でそういう新しい計画を若い人が立てるのを喜んだかということ、戦後日本だと台長、萩原先生しか将来計画を立てられなかった。日本でもやっぱりほかの国にはないような、あるいは他の国にあっても、世界一流の機械があればね、ずいぶん違うと。僕なんかアメリカで、ほかのところにはない人工衛星の観測データをもってたんで、地球のポテンシャルを求めるなんて仕事ができたわけだよ。だからやっぱりそういうのは日本でももたなきゃいけないというの

があって。

高橋：野辺山も将来計画の議論の中で出てきたわけですか？

古在：萩原先生の中には宇宙電波ってこともあったんですよ。だけどそういう具体的なものがなかったんですよ。だから岡山の74インチを作るってときにもまあ、グラブ・パーソンズって会社から買ったわけですよ。たぶん電波をやるって時にもそういう発想が何にもなければ、どこかの会社から買って、要するにあんまり特徴のあるものはできなかったんだと思うよ。あれは何の特徴があるかという、そのころから発達してきたんだけど、重力で45メートルの鏡面が変わっても焦点の位置を変えるだけで済むとかね、そういうのは日本の技術。それから音響光学型分光装置、あれは日本のオリジナルじゃないけどね、実は太陽電波でもやったの。だけどあそこまでいっぱいやったのは日本だけなんだよ。海部(宣男)君やなんか。僕はもうその時台長になって、アメリカの電波天文台から台長が来て、あれ見て「もう1台作って売ってくれ」って言ったよね(笑)。

高橋：古在さんは元々組合の活動をやっていましたけど、台長になったら逆の立場ですね。

古在：それはそうですね。なんかさ、いろいろ問題はあったよな。例えば僕は非常勤を雇うのを嫌がったんですよ。

高橋：何で嫌がったんですか？

古在：あれはね、僕らが東京天文台に入ってしばらくして、1956年ぐらいたったかな、国際地球観測年(International Geophysical Year; IGY)というのが始まって。あれで初めて東京天文台も非常勤を雇ったんですよ。あの頃は非常勤といってもね、常勤的非常勤といって給料は同じだったんだよね。パートじゃなかった。

高橋：雇ったのは事務系の人ですか？

古在：いやいや、研究部でも。国際地球観測年に携わったところ。ただ休みの日は、今でいえば

ゴールデンウィークは、あれは有給休暇ではないのだよね。そういうことで、僕は組合をやっていたから、あれはとても嫌な制度だと思っていた。僕が台長になってからもみんな事務なんかもずいぶん雇いたかったらしいのだけど、僕が嫌な顔をするので止めた。だから僕が台長を辞めてから急に増えてきたね。

それで天文台ではね、IGYのときの非常勤の人は結局常勤になった。ただ、常勤になるときに経費を毎年払わされていた。でもインフレだからさ、あの頃、だんだんマイナーファクターになったんだよね。それで良かったんですけど。それから緯度観測所にはね、常勤的非常勤がものすごくいた。各部長さんのところにみんな秘書がついてさ。東京天文台の時代には各部でそういう人を雇える金がなかった。緯度観測所はずいぶん恵まれていたんだよ。だから今は金があるから雇うんだよね。

高橋：長い間天文台長をやられましたけど、振り返ってみていかがでしょうか？

古在：いやあ、まああれも全く我流でやったよね。我流でやって、みなさんに「台長やる人はこういう風にやればいいよ」って言えるようなものじゃなかった(笑)。

高橋：だいたいご自身がこうなったらいいなど思ったようにいったんですか？

古在：まあ結果的にはなったよね。なったと思います。

●終わりに

高橋：ではご自身の研究生生活を振り返ると、どうでしょうか。

古在：いやいや、研究成果が上がるのは運と根という言葉がありますけど、運は良かったですよ。僕自身は自分が非常に地味な性質だと思ってたわけ。それで僕は本なんかを見て天体力学をやるうと選びましたけど、やっぱり地味な学問ですよ。ああいうので手柄が立つとかそういう話は

ないと思ってた（笑）。「俺は人工衛星が上がるのを予測してやったんだ」と言えばものすごくカッコいいんだけど、たまたま上がってみたら、そういうのをできる人がほかになくて。

高橋：手で式をこつこつと解いていくというのがいいんでしょうか。

古在：大学生の時「数学セミナー」という雑誌があって、その中で「エレガントな解法」なんてのがあったですよ。僕はエレガントな解法を見つける前に力づくでやっちゃおうっていう、そういう主義でやってきたから、ああいう萩原先生みたいな高級なことはやろうと思わなくて。

高橋：では最後に若い研究者に何かメッセージをお願いしていいでしょうか。

古在：日本の天文学者の研究成果への注目度は高くなってきたと思います。しかし、これに満足せず、さらに研究に励んでください。研究のやり方にもいろいろあります。個人の優れた発想による研究はもちろん大事ですし、すばる望遠鏡やALMAなどの重点領域に多くの研究者が協力して成果を上げることも、意義があるはず。自分のやり方を教授やなんかに相談するのもいいんだけど、自分の道は自分で選んで。やっぱり研究なんて好きじゃなきゃできないよね。人にやらさ

れてたらできないよ。ともかく、研究生生活を楽しんでください。

高橋・小久保：どうもありがとうございました。

参考文献

- 1) 亀谷收, 国立天文台ニュース2013年1月号「歴史トピックス 国立天文台水沢の歴史」
- 2) 与謝野馨, 天文月報77, 294

A Long Interview with Prof. Yoshihide Kozai [5]

Keitaro TAKAHASHI

Graduate School of Science and Technology,
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami,
Kumamoto 860-8555, Japan

Abstract: This is the final episode of the long interview with Prof. Kozai. Following the previous episode, he talks about his experience as the Director-General of Tokyo Astronomical Observatory and National Astronomical Observatory of Japan. How did the reorganization of the observatory and the project of large telescope proceed? He gives a message to young astronomers as well.